

蓬萊町だより

第五十八号
平成十二年十一月三十日
発行者 蓬萊町 文化部
編集者 蓮花

漱石の旧居を背景に躍った (その一) 巷と青春の光と驕

上野 静

激しい戦火の洗礼を受けて本郷台は一部を除き、殆どが丸焼け状態だった。

日本医科大学も当時の本館が火を冠って各所を修復しながら、診療を続けていた。現在の本館左病室の五〇％は草蓬々の荒地で某氏の所有物件だった。その左、小徑を挟み角地にあった和菓子の名老舗一炉庵も跡形もなく焼け落ち、大きな礎石(?)が横転し、戦火の激しさを物語っていた。無論、付近一帯は焦土の焼野が原だった。現在の丸山ワクチン研究所は雑木林で一部を切り拓き某材木商が材料置場に使用していた。この雑木林の前に一炉庵の焼跡から続く小徑を挟み、夏目漱石(後に森鷗外)が住んでいた。奥深い平屋建ての木造建築だった。戦火はこの付近で鎮火したらしく、幸いにも漱石の旧居(後に鷗外)は無疵のまま古色蒼然とした姿で残っていた。漱石達が借りていた建物は代々続く斎藤家の所

有物件だった。

私は当時、丸焼けになった当時の西須賀町(現在の弥生一ノ四)に上地を購入、小住宅を建築し一人で住んでいた。この時点、すぐ前の水野乾物店(当時)、上総屋関酒店と高尾寿司店(当時、甘味、飲料水)の三店のみが新しく建築、開業していた。私の家の周辺一帯は全くの焦土で根津神社の森は丸見え、また、東大のキャンパスも視界の中にあつた。夏になると背丈ほど雑草が生い茂り、夜ともなると、正体の知れない怪人(浮浪の野宿者)が突如、叢の中から出没するという怖い日々だった。私は独身で全くの一人住みだったので夜々、激しい恐怖心に悩まされ、眠れぬ夜を過ごしたものだ。戦中、戦後、勤めた軍需会社は平和産業に切り換えてモタツキ、給料はダウンするし、遅配、分割払いという状態だった。

私は思い切つて会社はリタイヤし、喫茶店(といつても当時のことで甘味、まやかしのコーヒーを使用)を開業、フジミ、ケーキス(屋上から微かに富士山を望むことが出来た)と銘打ち、水商売に経験のある知り合いの小母に経営を一任し、私は私なりに男の転業を模索した。しかし、終戦間もない頃としては生涯を預ける職業は中々見付けることは出来なかった。己むを得ず、当時、誰もが一度は経験したブローカーを手がけたのである。ブローカー達のメイン、ターゲットは戦時中の隠匿物資だった。話の源を突き止めるとブローカー達は禿鷹にハイエナが

集るように群がった。しかし、実際はデッチャゲ話で物資は何もなかった。源の張本人はブローカー達の一言口撃に合い、怒声、罵声の騒ぎの中に家財、道具などを略奪されるという今日では考えられないような無政府状態だった。実は別にして大口、小口の隠匿物資のブローカー話は毎日のように駆け回った。私も無駄とは知りながら、朝から駆け回った。こんな話でノン、センスな日々を幾日も費消したものだ。ストレスは脳内をオーバーラップし、頭を抱えていた。某日だった。私は某有力者に出会ったのである。重要物資の割当制は戦後も実施されていた。その横流し切符の入手を可能にしてくれたのである。無論、これは一種の法外取引で一步を誤ると危ない仕事だった。私は幸いにもこんな取引を月に数回、やり取りすることが出来た。これに依つて私は殆ど勞せずして、当時のサラリーマンの二、三倍の収入を得、悠々暮らしていた。しかし、そんな甘い「日日是好日」の日はそれほど長くは続かなかった。戦後経済が徐々に落ち着きを取り戻し、安定に向かうと切符のシステムが廃止されたからだ。気が付くと戦後も既に七、八年が経過していた。私の住む西須賀町の旧住民が疎開から徐々に復帰、また新たに土地を求めて集まり、焼野が原も次第にマチの形を整えて行った。和菓子の著名老舗、一炉庵も新築、落成し再開した。やはり老舗一炉庵はサスガに価値観が違っていた。民心の本物指向は強く、再開と共に旧一炉

庵を知る人、新しく住民になった人、遠くからも再開を口伝てに聞き、駆けつける人々で客足は繁く、巷を賑わした。その影響は著しく、マチ全体の活性化を促し漸く商店会の姿を取り戻してきたのだった。やがて、商店街はわが町のシンボル文豪漱石に因み、「坊ちゃん商栄会」と命名した。

何代かの会長を経て、見識と実行力に富み指導力のある紳士の一炬庵の当主、池田氏を新会長に選出、手始めは、商栄会存在のアピールをすることだった。集客策として史上画期的な商栄会ビデオの映写を実現、夏のイベント金魚掬いを一般にも開放、区商連には積極的に参加、親睦旅行会実行など多彩だった。折柄、高度成長経済の幕開けとなり、我が商店街も好況の波に乗り、各店とも売り上げを増強して行ったようだった。私の店もその後、二転、三転し、甘味、喫茶、駄菓子（副業に商品相場）森永製菓直売（池袋本部）のチエン店などを経て現雑貨店に落ち着いた。私は相変らず、殆ど小母に任せ切りだったので、この辺を区切りとし、再びサラリーマンの道を進むことにした。某氏の紹介だった。情報産業の帝国データバンクに入社したのである。日ならずして私は調査が契機で日産自動車（株）の小沢四郎氏と親しくなった。お互いに仕事の合間を縫って食事を共にしたり、画廊や展示会などに出かけたりで交歓した。

彼は昭和二九年東大経済学部を出て大学院修士コースを修了、頭脳明敏、口八丁、手八丁の敏腕家だった。

無論、会社は若手のホープとして期待していた。当時、彼はデイトラーとして中近東方面を担当していた。従って月に数回以上、空路を飛んでいた。サスガに若い社員の中では抜群の業績を挙げていたらしく、係長、課長を経て瞬く間に部長に昇進したのである。この頃、私は彼の出世を祝い、彼のよきパートナーとして彼女を写真で紹介した。彼女は私のよく知る同じ地区内に住む斉藤家の一人娘である。斉藤家は前記の通り曾て夏目漱石（後に鷗外）が住んでいた由緒ある旧家である。無論、我が商店会が「坊ちゃん商栄会」と名付けたゆかりの旧家である。

《筆者の紹介》

上野 静（うえの しずか）

岐阜県関市 生まれ

早稲田大学商学部卒、

「主婦の友」、「理研重工業」、

「帝国データバンク」勤務。

現在、日本随筆家協会会員。

戦中より文京区弥生町に在住。

町会活動の概要

平成一二年六月から

十月下旬まで

総務部

6/24 定例役員会・町会懇親会
出席29名（かねこ）

7/3 文京つづじ会定例総会

7/18 町内祭礼準備委員会

7/29 同右 小委員会

8/5 四町連合祭礼打合せ会（魚邦）

8/9 町会長ほか三名出席

8/19 祭礼準備委員会（常瑞寺）

8/30 同右、三回

10/12 同右、四回

10/14 定例役員会、
「地域安全運動防犯座談会」

祭礼慰労会（常瑞寺）

婦人部

6/10 資源回収

6/16 日赤献血奉仕活動（本郷郵便局）

6/17 本郷清掃協力会、優良会員表彰、橋

本文子さん・堀江晴子さん受賞

6/29 日赤向ヶ丘分団班長会

7/4 清掃工場見学

7/6 向ヶ丘地区連合会婦人部、施設見学

7/7 日赤献血奉仕活動（シビックセンター）
1）

7/13 資源回収

7/19 定例部会

7/27 文京つづじ会、除草奉仕

8/7 婦人部創立三十周年記念行事

準備委員会

8/21 日赤奉仕活動、「文京ふるさと祭り」救護班

8/24 資源回収

8/31 定例部会、祭礼準備活動

10/1 赤い羽根募金。¥二〇一、三〇〇

婦人部創立三十周年記念行事

10/18 婦人部、交通安全誘導。

10/19 防火婦人部視察研修会

日赤献血奉仕活動

資源回収

交通 部

6/26 交通安全協会、駒込警察

7/19 サミット関連安全運動

7/21 同右（かねこ前交差点）

8/28 祭礼御輿渡御許可申請

文化 部

7/10 「蓬萊たより」第五十七号配布

〔平成十二年敬老〕（節目の御祝い）
左記の方々に町会より記念品をお届けしました。（敬称略）

〔喜寿〕 飯久保勝孝、室屋ハル子、小川義信、川西敦子、小林義江、栗島喜代子、福井三郎、林 小夜子、梶原富子、松田 亨、菅野四郎、山本ヤスエ、鈴木哲夫、中川充子、飯久保晴子、渡辺 正、横山良子、白井信子、川西正造、山路豊子、田中繁一、伊藤幸作、須藤よし江、大熊幸枝、溝口清太郎、西岡カズ子、高木 清、福島光夫、梶谷かん、樋口キミ、桑田兼好、岡田マキ、船橋徳太郎、平出せい、野呂瀬ひさえ、関根鈴枝、翁 めつえ、原ハルイ、原山賢一郎、高島正義、豊田スエ、関根藤作、塚田マツ、

〔九十一歳以上の方〕

小山信次、清水康政、小林佐二郎、森田たつ、（婦人部担当）

訃 報

当町会の方で平成十二年六月～十月にご逝去された方は左記の通りです。謹んでご冥福をお祈りいたします。

高野繁治様 六十九才 二二二、三三三
杉三重子様 六十四才 二二二、三三三、六
船橋徳太郎様 八十八才 二二二、六六六
佐久間 浩様 八十三才 二二二、四四九

平成12年度根津神社祭礼会計報告

収 入		支 出	
協賛金291名	2,183,000	準備関係費	184,698
本会計より催事費	300,000	協賛金関係費	536,876
第二会場費	10,000	設営関係費	533,468
		渡御関係費	851,304
		修理積立金	300,000
		次期繰越金	86,654
	2,493,000		2,493,000

蓬萊句壇

白菊の群がり咲けり御嶽山
紅葉映ゆ四季ある国に手を合わす

福山七重

歩み止め心いやさる萩の月
虫の声耳鳴り区別つけられず

岡田栄子

白桃に笑む仏壇の親父殿
三崎坂御命講の衆練り上がる

青木拜寿

秋点す双曲線のハイウエイ
寅さんの別れの旅や柳散る

金子脚雨

とめる手に幼さのこる踊りかな
蓑虫の着のみ着のまま枝渡り

彦坂つぐを

秋蝶は母の御霊(みたま)よ我を訪ふ
山桃の熟れて甘しと夫笑顔

船橋小糸

かがまりて手折りし菊や母の影
秋の灯を庭に点して雨戸閉む

城山吹雪

鳴く虫は雄のみと知る自嘲かな
躍りたし恥ずかし彼の来ていれば

津久井たかお

襟足の黒子みられし踊り髪
白桃や少女この頃反抗期

平山雅美

負け菊に水遣る菊の主かな
水蜜や母の乳房を吸うごとく

小野向雪

愁傷の鏡あらわに齡うつす
橋の名に遊里のなごり柳散る離

池田連木

仲見世で買ふ竹光や義士の日に
みぞるるやおつかれをいふ楽屋口

古川浦雨亭



編集後記

「蓬萊たより」の巻頭を永い間執筆して戴いた「林 順信」先生のご都合で今回は「上野 静」先生に原稿を戴きました。氏は執筆者紹介にもある通り戦中戦後の動乱期にあつて、今の人では想像出来ない経験をされて来られました。しかも医大坂上の「坊ちゃん商栄会」と言うささやかな商店街の中にあつて蓬萊町近辺の世相を見ておられます。エッセイストとしても多くの随筆を発表されて居られます。林先生とは違った面で紙面を豊かにして戴けることでしょう。

今年の根津様の本祭りは荒れ模様のお天気で何かと大変でした。そんな中で事前の準備や当日の細々とした仕事に力を添えて戴いた皆様方には心から御礼申上げます。今からお知らせするのは少し早すぎますが、あと六年先の平成十八年(2006年)には根津神社が現在の地に遷座されてから三百年になります。根津様としては、既に「三百年記念祭」を盛大に行うべく計画を練って居られる様です。

あと一箇月程でいよいよ二十一世紀が始まります。IT革命とやらで世界中が胎動しています。こんな時こそ大地に足をふまえて歩きましょう。

編集委員

三宅栄三 竹中俊之 常岡 裕

青木喜一 池田 暉